

川添 裕 『江戸の見世物』

上久保 達 夫

皇學館論叢 第三十四卷第三号
平成十三年六月十日

一

本書を読むと随所に示された視点に読者は教えられ、事の本質をついた説明はまさに「目から鱗が落ちる」思いにさせてくれる。その理由や挙例は後述するとして、本書の内容とその特徴を最初に手短に述べれば次の通りである。

著者川添裕氏も記すように一次資料を駆使して、近年の各分野の優れた研究成果も参考に、新たな視点や事実を多く出すことに心掛けたという、著者なりの江戸の見世物像の提示である。もちろん、表題が示すように江戸時代、とりわけ近世後期（文政期と安政期の二期が主）の日本の見世物が主題ではあるが、折に触れて（各章末と最終部分のお名残口上―むすびに代えて）

現代の見世物へと論及し、見世物の今後の展開について著者なりの展望が示されている。そして、そんな現代の見世物には近世後期の見世物（各種類が本書では詳しく紹介される）を水源とする娯楽の川が滔々と流れており、それはまさに現代娯楽の母なる流れであるという。また、見世物を伝統芸能一般に敷衍して、そこに見られる共通の特徴を「当代性」と「同時代性」の創造原理であるとし、これらが永久運動として展開するところにその存在意義を見出し出している。すなわち、各時代に巻き起こす人間の「想像力の渦巻」が見世物の本質であるというわけだ。

結論部分を先取りしてしまっただが、次に本書の構成を示す目次を掲げ、以下にその章立てに従って内容の概略と私筆者の若干の感想を述べることにより、本書の紹介としたい。

いざ、江戸の見世物遊歴へ—まえがきに代えて

第一章 浅草奥山の籠細工

第二章 奇妙な細工の楽しみ

第三章 珍しい動物のご利益

第四章 軽業のよろこび

第五章 生人形の想像力

お名残口上—むすびに代えて

二

「いざ、江戸の見世物遊歴へ—まえがきに代えて」は本書の導入部分であるが、ここに二人の重要な人物を登場させて本書で取り上げる江戸の見世物遊歴の同伴者に仕立てる。なぜ重要な人物かという点、二人は江戸時代文政期（今から約百八十年前）の同時代人で、ともに隠居の身分で当時の見世物に精通して、その見聞の記録（書物）を残した粹まことな下町の江戸っ子だからである。現代から一挙に百八十年前にタイムスリップをして、直まに触れた二人に体験談を語らせながら臨場感をもって江戸の見世物を再現しようという趣向である。著者は近世後期の江戸の見世物の興行件数から、その全体構成とジャンル別の変遷を分かりやすい図表（一二頁）に示している。これは本書の構成

と展開を理解・予測する上で好都合の資料である。それによれば、この時代の江戸の見世物興行の半数近く（四十六％）が細工見世物で、第一章で取り上げる籠細工や第五章の生人形などはその代表例である。ちなみに、第四章の軽業の曲芸・演芸見世物はそれに続き（三十一％）、第三位の動物見世物は第三章で扱われる（十四％）。第四位の間人ジャンルの見世物は一分として設けられておらず、ただ最終部分（二二七頁）で一部触れられているに過ぎない。

三

第一章では江戸の見世物の代表例として籠細工大流行の様子が先の二人の記録などから再現・描写される。当時の様子を知る手懸てがかりりとして本書で多用されるのが、いわゆる「見世物絵」（浮世絵・引札など）であり、全体で四十数点（内著者所蔵のもの三十数点）が掲載されている。それらについてはその都度、絵の詳しい説明と綿密な考証がなされ、活字のみならず視覚にも訴えて読者の関心を強く引き付け、見世物を多面的・立体的に理解するのに大いに効果的である。さらに、現場では口上話芸も見世物効果を一段と高める手法とされ、見世物とは視聴覚の両面から見物人の想像力を喚起する総合娯楽であると教えら

れる。

実は、筆者が「目から鱗が落ちる」思いをして感心したのは本章なのだが、それは見世物の経済効果についての記述である。著者によれば、寺社の門前での見世物興行は寺社側と興行側の何重もの相身互いの関係があり、特に賽銭高の増加という興行側の寺社への経済的貢献が大きいという。著者はこの近世後期における見世物興行の場としての寺社の境内を「信心と娯楽」一体の経済的関係や人的関係を含む有機的な鍵となる場所として捉え、こんな関係把握をなかなか魅力的な枠組みの発見だと自負している。このことはあながち著者の独り善がりの自画自賛ではないことを筆者のフィールド経験からも合点するからである。

もう一点感心したのは、本書の特徴である一次資料に基づく綿密な実証性に関する点である。当時の札銭（入場料）三十二文の貨幣価値を正確に現代に置き換えることは諸般の理由で困難とした上で、あえて著者なりの目安に酒の値段を挙げて換算している（例えば、安酒一合八十二文より三十二文は二〇〇〇年現在の一〇〇〇円前後としている）。著者はアバウトな類推としての価値感覚と断わってはいるものの、いつの世にも庶民に欠かせない生活必需品の酒を目安にしているのは粋狂で面白い。また、見世物の上がり（興行収入額）を歌舞伎の「千両役

者」の千両（年収）と比較しているのは面白いし、分かりやすい。このようにエンターティナーとしての著者の読者への気配りが随所に感じられて好感が持てる一書に仕上がっている。そして、記録に残る上がりと入場料三十二文から入場者数を推定する手際の良さも、それしか方法がなかったと言ってしまうはそれまでだが、本書執筆に当たって著者の相当徹底した下調べ（事前準備）の様子が窺われる。このような綿密な考証は前述したが、本書を貫く著者の一貫した姿勢であるように見受けられる。

籠細工見世物は数十万人の江戸庶民の目を楽しませる娯楽であった。と同時に、関係者一同に多大な経済的メリットをもたらした興行でもあった。このように見世物を多面的・多重的・ダイナミックな視点から捉えることの重要性が本章では強調される。

四

第二章では、時代を行き来しながらもさらに突っ込んだ細工見世物の考察がなされる。籠細工以外の細工見世物の興行も、江戸のみならず当時の大坂・京都・名古屋・伊勢・安芸宮島などで行われた、いわば全国的な流行現象であったことが史料

をもとに考証される。興行場所の寺社の開帳とその興行との関係は前記「信心と遊楽」一体であるが、見世物興行大当たりの場合には、見世物と信心の本末転倒が起きる事実も語られる。そこでこの見世物自体が、かなり意識的・計画的に信仰の文脈を利用した仏教の当世風な「見世物化」であるという。従って、細工見世物に限らず当世の歌舞伎・浄瑠璃・俳諧・戯作・艶本などのジャンルにおいて、開帳ネタや当て込みは非常に好まれた形式であった。「つくりもの文化」としてのこの細工見世物の水脈が、今日の人気娯楽の中にも取り入れられて活かされ、皆に喜ばれているとする著者の説は卓見だ。

第三章は外来の動物が見世物に利用される場合の紹介である。それだけで一見の価値ある舶来動物の見世物は、江戸の庶民を楽しませ続けた近世後期の見世物の柱の一つであったという。具体的には、著者所蔵の見世物興行の引札にあるヒクイドリ・インドゾウ・ロバ・ヒトコブラクダなどの長崎ルート（幕末期には横浜ルート）で入ってきて見世物に出されたのを例にして、その様子が紹介される。それら見世物動物は霊獣・聖獣・神獣扱いで、盛りだくさんのご利益りやくがあるとされた。見るご利益（眼福）としては悪病払いや疫病除けがある。ラクダのおしっこ霊薬説は本場ラクダ文化圏でのラクダの位置付けを必要とするしながらも、決して無知蒙昧な発想ではなく、西方世界か

らの珍獣のありがたさをベースに、舶来の民間療法と在来伝統の民俗が混淆こんこうしつつ現れた「妙薬」であるとするのは、奇抜な発想だけにある種の驚きを隠さずにはおられなかった。ラクダご利益のもう一つに、ラクダの雌雄がきわめて仲睦まじいという伝承から夫婦和合の象徴と見られ、「おしどり夫婦」のようになりに仲良くから長寿をイメージするものと捉えられるようになることである。いずれにしても、これらの動物を描いた見世物絵はまるで仏画やお札・お守りのようなものとされた。そして、これら舶来動物の見世物はまさに「旅する驚異のメディア」として、見物者に大きな影響を与えた。その後の動物見世物は、特に明治以降、ご利益の吹聴ふいちょうはさっぱりになってしまい、その居場所も動物園やサーカスの世界といった新しい時代に生きる見世物へと変わってしまった。しかし、この動物見世物の伝統は、形を変えて場所を変えながら生きている。そもそも伝統（文化）とは古いモノが古いままにあるのではなく、新しいモノを取り込んで再創造されてこそ伝統は継承されるのではないだろうか。

五

第四章と第五章の舞台は先の文政期（一八一九〜二九）から

三、四十年程時を進めた安政期（一八五四―五九）である。この年間は文政期とならぶ見世物史上のもう一つの転回点で、見世物の本質に迫ろうとする著者の意気込みと気迫を一段と感じさせる内容であった。

「軽業のよろこび」の主人公は幕末期最大の軽業スター早竹虎吉なる人物である。彼の足跡は大坂・堺・京都・吉野山・伊勢・宮島・徳島と江戸は両国・浅草・市ヶ谷であったと記録に残されている。そればかりか文明開化の直前、すなわち明治維新の前年一八六七年九月に彼の一座は横浜からアメリカへと旅立ち、翌年二月に当地で客死するまでにサンフランシスコとニューヨークでも現地公演して、海外にもその足跡を残している。まさに「旅する見世物」であり、しかも技量・人気ともに兼ね備えたスケールの大きい名人として、彼は国際舞台へと駆け上がった。その軽業見世物は単なるアクロバットとしての身体芸の披露にとどまらず、よく知られた伝統演目の見世物化・曲芸化でもあったとされる。「なじみの伝承物語世界」と「あやうい身体運動」が交差する地点に、この時代の曲芸の神髄があると著者は見る。しかも、豪華な衣装と立派な道具立てに彼のこだわりの音曲が加わって、今までに見たどんな見世物小屋にもあった口上も存在する。騒々しいほどのお囃子である。実は、アメリ

カ公演の際に不評を買ったのが日本独特のこの音楽なのである。時を隔てた現在、イチロー選手らの活躍で本場メジャーリーグの試合を衛生中継放送で見る機会もぐんと増えたが、その感覚で日本のプロ野球実況中継を見て感じるのは、その応援に鉦やラッパなどの鳴り物が何と多いことか。それを耳障りだとか不快だとかの価値判断は擱くとして、異文化交流の久しく絶えてなかった時代の当地の反応を想像するのに難しくはない。そのことは双方にとつて異文化体験・異文化理解とその相互理解の欠如からくる一種のカルチャーショックであっただろう。著者もこれを「価値観のボタンのかけちがえ」と表現しているのはまさに正鵠を射ている。こうして彼のアメリカ公演は一部の「異文化接触の御難」に遭遇しながらも、その技芸は大いに評価され、賞賛もされたようである。

「生人形の創造」では、安政期から明治にかけて忘れることのできないもう一つの見世物がこの生人形であるとする。すなわち、生人形とは「リアルな細工を特徴とするほぼ等身大の見世物人形で、幕末の安政期に勃興し、明治半ばまで盛んに行われた興行；それは江戸の見世物の掉尾を飾る存在といつてよく、見世物の第一を占める細工分野から生まれた新機軸」（一六六頁）と説明される。さらに、現存するこの錦絵四十数点中、著者所蔵のものが二十一点あるとのことからさぞ深い思い入れも

あると推測される。これも細工見世物の長い伝統から生まれたものであることを教えられる。ここでも生人形の創始者で当代随一の名匠細工人が登場し、その生い立ちや足跡が紹介される。彼は「つくりもの」を手がける手技の職人であり、「職人王国」「細工の王国」の一員として、祭礼の「つくりもの文化」の水脈と交差する人物である。一八五四年一月、西の見世物のメッカ難波新地でデビューし、「大坂下り」（大坂から江戸へ下ること）で翌一八五五年二月、東の見世物のメッカ浅草奥山で行われた興行が彼の江戸初お目見得であった。折しも、浅草寺観世音開帳の真つ最中とあって、「見物群をなす」様子が記録にある。開帳と見世物の「信心と遊歴」一体の関係はすでに述べたが、時代が移ってもあまり変わらない。ただ、翌年に大流行した同じ浅草奥山での興行と比較して、「メディアの話題性」の点で今一つ反応が鈍いことが指摘される。その因果関係（「メディアの話題性」で鈍い反応の理由として、新種の見世物であるが故の当初の「ためらい」「とまどい」などの版元側の待ちの姿勢を挙げている）が著者の手持ちの史料から論証されるのだが、その論の運びがまたまた手際よく、提示された仮説も想像力に富んで独創的で、かつ的確なのは何とも小気味よくさえ感じられる。著者のこんなスタイルが最終章まで貫かれることにより、論理明快で説得力のある文章として本書は構成されて

いるという印象を強く持つ。

「お名残口上―むすびに代えて」は本書の結論部分である。その内容のアウトラインは冒頭で先取りして述べたので繰り返す必要はないだろう。本書執筆に当たった著者の心構え、今までを振り返っての各章の総括と今後の展望であった。実は、現代の美術館や博物館も新来の見世物小屋であることを教えられた。つまり現代にあっても江戸の見世物の系譜の視点に立つことが重要であると示唆されるのである。

最後に、百聞は一見に如かず、先ずは一度、篤とくとご覧（お読み）あれ！

ちなみに、川添裕氏は平成一四年度に本学文学部コミュニケーション学科の専任としてご赴任の予定である。なお、本年度は非常勤として「芸能史」の集中講義をご担当の由、該博な知識に裏打ちされた歯切れのよい関東弁での論理明快なご口上が今から楽しみです。

（岩波新書新赤版六八一、平成二二年七月一九日発行、二四六頁、本体価格七〇〇円）

（かみくぼ たつお・皇學館大学教授）